柔道における指導方法と指導環境についての一考察
―脳震盪により多発する柔道の死亡事故を受けて―

中根　雅貴(競技スポーツ学科　コーチングコース)
指導教員　村田　正夫

キーワード：脳震盪　部活動　初心者

１、緒言

近年、柔道での脳震盪より引き起こる死亡事故が後を立たない。統計によると中学校･高校での柔道での死亡事故は1983年から2010年までの28年間で114件報告されている。114件のうち、74件が頭部外傷による急性硬膜下血腫や脳挫傷によるものであり死亡事故全体の67.8%を占める。事故の大半は部活動で発生しており、死に至らずとも頚髄損傷により下半身不随などの日常生活に支障をきたしてしまう事も少なくない。

本研究では、死亡事故が起きる要因を指導方法と指導環境の2つの側面からアプローチを行い、また、選手と指導者の立場からも焦点を当てる。そこから事故を未然に防ぐために、部活動における柔道の指導方法と指導環境を考えることを目的とする。

２、研究方法

本研究の調査対象は、部活動で柔道部を指導している指導者および、柔道部に所属している中学校1年生～高校3年生までの男女を対象とする。

研究方法はアンケートを実施する。アンケート調査を実施し､集計･分析した上で、指導方法を検討する。

３、結果と考察

1)選手

今回調査した中高生の9割が受け身の練習を約1ヶ月未満で終えていた。受け身の練習には一定の習得期間を終えてからも、その技能レベルに応じた受け身の練習が必要である。また、練習中に頭を打った際にそのまま練習を続行している者がほとんどで、医療機関を受診している者は僅かであった。

2)指導者

アンケート結果から、選手の回答と比較していくと、回答内容で選手とのギャップが多々見られた。この事から脳震盪が選手にもたらす影響を指導者自身が、より関心を持たなくてはならないことが分かった。

４、まとめ

本研究で部活動の実態を調査する中で、組織と現場の考えが完全に合致していなかった。また、現場を見ても死亡事故が発生しているが、事故や脳震盪に対する意識が指導者、選手共に低いことが明らかになった。現場の意識改革を最優先にしなければ、事故が減ることはない。

参考資料

全日本柔道連盟「柔道の安全指導」　2011年6月〔2011年第3版〕P1～40